慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	目的-手段図式から習慣へ : パーソンズとブルデューの功利主義批判を通して
Sub Title	From the means-ends schema to habitual action : through the critique of parsons and Bourdieu for the utilitarianism
Author	村井, 重樹(Murai, Shigeki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.43- 54
JaLC DOI	
Abstract	In this paper, I will consider the action theory of Parsons and Bourdieu through their critique of the Utilitarianism. Both Parsons and Bourdieu criticize the Utilitarianism, because they think it inadequate to theorize the social action from the utilitarian perspective. At the same time, to analyze the social action adequately. Parsons and Bourdieu construct the action theory respectively. The former's is called the voluntaristic theory of action and the latter 's habitus theory. Parsons criticizes the utilitarian theory, in there spect that its norm is restricted to the economic utility. But, he evaluates the actor of the Utilitarianism which acts under the means-ends schema and in herits its action schema. Therefore, he postulates the conscious action, when he constructs his voluntaristic theory of action. Bourdieu criticizes the utilitarian theory for its concept of the action and the interest. Though the utilitarian theory postulates the conscious calculation of the actor. Bourdieu thinks that the social action is not necessarily conscious from the perspective of habit us theory. So, Bourdieu claims that the utilitarian theory cannot understand the human action or the interest enough. By comparing the action theory of Parsons with that of Bourdieu through their critique of the Utilitarianism. I think that it is possible to demonstrate the importance of Bourdieu's concept of habitus in the action theory, which is different from Parsonian action model, that is the means-ends schema of the conscious actor. For, due to the influence of Parsons in sociological theory, it seems that habitual action has been neglected for along time.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

目的-手段図式から習慣へ

——パーソンズとブルデューの功利主義批判を通して——

From the Means-Ends Schema to Habitual Action

—Through the Critique of Parsons and Bourdieu for the Utilitarianism—

村　井　重　樹*
Shigeki Murai

In this paper, I will consider the action theory of Parsons and Bourdieu through their critique of the Utilitarianism. Both Parsons and Bourdieu criticize the Utilitarianism, because they think it inadequate to theorize the social action from the utilitarian perspective. At the same time, to analyze the social action adequately, Parsons and Bourdieu construct the action theory respectively. The former's is called the voluntaristic theory of action and the latter's habitus theory.

Parsons criticizes the utilitarian theory, in the respect that its norm is restricted to the economic utility. But, he evaluates the actor of the Utilitarianism which acts under the means-ends schema and inherits its action schema. Therefore, he postulates the conscious action, when he constructs his voluntaristic theory of action.

Bourdieu criticizes the utilitarian theory for its concept of the action and the interest. Though the utilitarian theory postulates the conscious calculation of the actor, Bourdieu thinks that the social action is not necessarily conscious from the perspective of habitus theory. So, Bourdieu claims that the utilitarian theory cannot understand the human action or the interest enough.

By comparing the action theory of Parsons with that of Bourdieu through their critique of the Utilitarianism, I think that it is possible to demonstrate the importance of Bourdieu's concept of habitus in the action theory, which is different from Parsonian action model, that is the means-ends schema of the conscious actor. For, due to the influence of Parsons in sociological theory, it seems that habitual action has been neglected for a long time.

1. はじめに

本稿は，T・パーソンズとP・ブルデューの功利主義批判を通して，両者の社会学理論における行為者像についての比較検討を行う。パーソンズ，ブルデュー両者の社会学理論は，それぞれ，主意主義的行為理論，ハビトゥス論という，社会的行為に関する理論を備えている。そこで，社会学理論において

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程（理論社会学）

重要な位置を占めるであろう両者の行為理論の検討を行い，彼らが抱く行為者像に対する基本的な視点を確認する。また，その基本的な視点の確立の背景には，社会学的パースペクティブからの功利主義批判という共通の問題意識を両者が抱き，その超克を目指していたということがある。それゆえ，ここでは，パーソンズとブルデューのそうした問題意識を導きの糸として，彼らの社会学理論において，いかなる行為者像が中心に据えられるに至ったかを明らかにしていくことが目的となる。

さらに，もちろんのこと，行為理論は，ミクロ分析とマクロ分析をつなぐ位置にあるといえる（富永，1986: 81)。そのため，社会学理論において，いかなる行為者をその出発点に置くかという問題は，どのように社会の分析枠組みを構築するかという問題と密接に関わってくる。パーソンズとブルデュー両者にとっても，この問題は当てはまるといえよう。そこで，メルクマールとなるのが，両者と功利主義の関係，換言すれば，功利主義との距離なのである。

以下，本稿では，功利主義の行為者像との関係を中心とすることで，パーソンズ，ブルデューの行為者像の明確化を図り，両者の視点の相違を浮き彫りにしたい。そのことで，社会学において多大な影響を及ぼしてきたパーソンズ行為理論とは異なる形でのブルデュー行為理論の重要性を示せると考えている。

2. パーソンズと功利主義

2.1 功利主義的行為理論

パーソンズの『社会的行為の構造』は，第二次大戦後の社会学に大きな影響を与えた著作としてあまりにも有名である。その中で，パーソンズは，ヨーロッパにおける二大思想潮流である実証主義的伝統と理想主義的伝統の収斂を目指して，前者からA・マーシャル，V・パレート，E・デュルケム，後者からM・ウェーバーを検討し，「主意主義的行為理論」を確立しようとした。そして，こうした収斂を行うにあたって，パーソンズがその行為理論の基本とするのが「単位行為 (unit act)」であり，その主意主義的行為理論は功利主義的行為理論を批判的に検討することによって定式化がなされたものである。それゆえ，パーソンズ行為理論の前提を確認するためには，功利主義的行為理論との関係から見ていくことが必要であるだろう。

パーソンズは自らの行為理論を構成するにあたって，その着想を功利主義から得たということができる（厚東，1980; 山下，1983)。だが，それは着想を得たのであって，功利主義的行為理論をそのまま受け継いだのではないということでもある。では，功利主義的行為理論のどこに着目し，どこに不満をもったのであろうか。ここで，パーソンズのいう功利主義的行為理論の特徴を確認しておく[1]。

パーソンズは，功利主義的行為理論において「致命的に重要かつ本質的なものは，分析的意味における行為の目的と，状況に属する行為要素との峻別」(Parsons, 1937＝1976: 104，厚東，1980: 77）と理解する。『社会的行為の構造』におけるパーソンズの目的は，実証主義的伝統と理想主義的伝統の収斂であり，それを媒介する役目を果たすのが，このように特徴づけられる功利主義的行為理論のもつ目的-手段図式であった。なぜなら，「パーソンズにとって行為の骨格を形づくるものは，手段-目的図式にあった」からである（厚東，1980: 77)。このことは，パーソンズが『社会的行為の構造』の冒頭に「意味をもった人間の行為の究極的要素について考えてみると，それらはいずれもまず『目的』と『手段』の範疇に結びついている」というウェーバーの引用を掲げていることからも読み取れる。つまり，パーソンズは，目的-手段図式を行為の最重要の要素として位置づけたのである。生物学的な遺伝や環境という要

素によって行為を説明しようとし，行為者の主観的要素を排除する実証主義的伝統の中で，功利主義的行為理論が特殊な位置を占めるのは，この目的-手段図式への着目ゆえであった。

また，パーソンズが社会的行為を定式化する際に，どうしても排除できない要素は行為者の「主観的側面」である。パーソンズに従えば，「人間行為を対象とする科学は，もしも皮相的水準を越え出たいと願うなら，この次元に属する事実［主観的側面］が，人間行為に含まれる他の次元に属する事実の科学的説明に対して有意性をもつことによって提起される方法論的諸問題を回避するわけには決していかない」(Parsons, 1937＝1976: 51)。パーソンズによって，実証主義的伝統が非難されるのは，その行為理論が主観的側面を十分に考慮できていないからである[2)]。

しかし，功利主義的行為理論は，パーソンズが社会的行為の本質的要素 (essential elements) として理解するものに関心をもつ理論である (Camic, 1979: 520)。つまり，功利主義も，その単位行為が条件・手段・目的・規範という要因によって構成される（厚東，1980: 77)。パーソンズは，社会的行為を定式化するに際し，こうした点で功利主義的行為理論を評価しつつも，いまだ不十分な点に不満を抱き，自らの主意主義的行為へと発展させていくのである。では，パーソンズは，功利主義的行為理論の何を不十分と考えていたのだろうか。さらにその点を考察していく。

2.2 功利主義批判

パーソンズの功利主義的行為理論に対する不満は，その目的と規範の位置づけである。まず，目的の地位に関して，パーソンズは，「功利主義的観点からみて保持されるものは，ただ目的間の分析的相互独立性のみ」であるという (Parsons, 1937＝1976: 104)。このため，功利主義は，目的相互の関係については顧慮しない，つまり行為過程の目的の内容については何も言わないことになる (Camic, 1979: 521)。なぜなら，そこには「『合理主義的な』目的-手段図式を偏愛するという功利主義思想に特有な根強いバイアス」(Parsons, 1937＝1976: 93) が含まれているからである。ここで問題となるのは，この「功利主義思想に特有な根強いバイアス」であるが，それは功利主義の規範概念に関わるため，次に規範の位置づけについて見ていくことにしよう。

パーソンズによれば「［功利主義的］思想においては，『能率の合理的規範』と呼ばれる一つの特殊なタイプが圧倒的に強調されていた」(Parsons, 1937＝1976: 95)。すなわち，功利主義においては，この特殊なタイプの規範に注意が集中されているのである (Parsons, 1937＝1976: 95)。これこそパーソンズが功利主義的行為理論の規範の地位に対して批判をなす点である。ここで功利主義が出発点としているのは，「行為者が自らの行為状況について合理的な科学的知識をある程度もっているという想定である」(Parsons, 1937＝1976: 101)。こうした見地に立てば，行為者は科学的な探求者であるかのように行為することになり，目的-手段図式は科学的に検証可能な合理性によってのみ結び付けられることになる。パーソンズは，この意味での狭い合理的規範によっては，社会的行為を十分に捉えきれないと考える。

そして，功利主義的行為理論がこの前提に立った場合，深刻な帰結に導かれるという。いわゆる「功利主義のディレンマ」である。パーソンズは以下のようにいう。

> 「このように，目的の地位について，実証主義思想は『功利主義的ディレンマ』に陥ることになる。つまり二つのうちのいずれかに落ち着かざるをえない。目的の選択における行為者の能動的作用因を行為の独立要因として目的要素をランダムなものにするか，あるいは目的のランダム性という客

観的含意を否認し，目的の独立性を消去し，目的を状況の諸条件と融合して目的を非主観的範疇―主として生物学的理論の分析的意味における遺伝や環境といった範疇―によって分析可能な要素とするかのいずれかである」(Parsons, 1937＝1976: 105-6)

一方で，目的選択のランダム性を仮定した場合，行為者が合理性を唯一の規範として手段を選択すれば，ホッブスのいうような「万人の万人による闘争」が帰結される。他方で目的そのものを合理的に選択すれば，科学的知識に基づく選択となり，主観的観点が失われる。つまり，行動主義や環境への適応と大差がなくなるのである。パーソンズは，こうして功利主義が内包する問題点を検討，批判していく中から，自らの主意主義的行為理論へと展開していくのである。

2.3 功利主義から主意主義へ

パーソンズは，単位行為を行為者，目的，状況（条件と手段），規範的志向という属性によって捉える(Parsons, 1937＝1976: 78-9)。もちろんすでに指摘したように，単位行為の構成は，功利主義も同じである。ただ，功利主義的行為理論は問題点を抱えており，その帰結が「功利主義的ディレンマ」であった。そこで，パーソンズは，主意主義的行為理論を確立することによって，「功利主義的基盤からの離脱」を目指すのである。

そして，「功利主義的基盤からの離脱」に際して重要となるのが規範概念である。パーソンズが，功利主義の規範概念を特殊であると批判するのは，次の２点に対してである。一つは，社会的側面が無視される規範の私性，もう一つは，価値合理性など，他の規範類型を無視する能率性の規範への偏向である(厚東，1980: 80)。こうした特殊な規範概念からは，パーソンズが定式化した「ホッブス問題」を解くことはできない。「万人の万人による闘争」が帰結されるのである。それゆえ，「パーソンズは，規範の私性には規範の共有性を，能率の規範には価値の規範を対峙することにより，功利主義の規範観念の一面性を克服しようとする」(厚東，1980: 80)。

ここでパーソンズは，功利主義の科学的な合理性による行為ではなく，価値や理念によってなされる行為を想定する。つまり，科学的に検証可能な合理的知識という観点から見た場合，非合理的と見える行為である。宗教的行為などがそれにあたるのであるが，パーソンズにとってはそうした価値こそ，行為を成り立たせるための重要な要素となるものであった。この価値は，個々人の総和を超えたところに生成する創発特性であると同時に，社会的に望ましいものとされる。また，行為者にもそうした価値を帯びて内面化されることによって，行為を導く要素となるのである。パーソンズは，功利主義批判を通して，以上のような「共通価値による統合」をもって，「ホッブス問題」を解決しようとしたのである。ゆえに，パーソンズによって，「社会学は『共通価値による統合という属性によって理解することのできる社会的行為体系に関する分析的理論の展開をめざしている科学である』と定義することができよう」(Parsons, 1937＝1989: 191) と定式化されることになるのである。

だが，ここではパーソンズの主意主義的行為理論がもつ行為者像の検討が目的であるため，「ホッブス問題」に対する解決の詳細には深入りせず，もう一度功利主義との関係について確認しておくことにする。パーソンズは，功利主義の目的や規範の位置づけには批判的であったが，その基本的な行為図式は評価し，自らの主意主義的行為理論に受け継いでいる。ゆえに，「主意主義的行為理論の生成母胎は功利主義にある」といえる（厚東，1980: 81)。つまり，「単位行為」に関しては構造的に同型でありながら，「功利主義の枠組に，規範観念の多様化，目的の内生化を施して得られるのが主意主義」なのである（厚

東，1980: 78)。

こうして，パーソンズの主意主義的行為理論における行為者像が確立される。それは以下に示す高城和義の引用に明瞭であろうと考えられる。

「行為者は，未来の望ましいある特定の事態を表象に思い浮かべながら，特定の条件下で，その実現にもっともふさわしい手段を，なんらかの規範に依拠して選択し，目的達成に努力する存在として立ち現れることになる。こうしたパーソンズの『単位行為』範疇の中には，目的定立，目的達成にふさわしい手段の選択，目的を成就しようとする『意思と努力』，この3点において，そして同時に，これらを行為者の『主観的観点』に即して理解しようとする点において，主意主義的性格が込められているということができる」(高城，1986: 44)

したがって，パーソンズによる行為者は，ある規範に導かれながら目的-手段図式を用いて，意識的に行為するものとされるのである。

3. ブルデューと功利主義

3.1 ブルデューの功利主義批判

ここまで，パーソンズが功利主義的行為理論の批判を通して，いかにして主意主義的行為理論を確立し，いかなる社会学を構想しようとしたかを概観してきた。こうした功利主義を批判する試みは，パーソンズが「ホモ・エコノミクス」から「ホモ・ソシオロジクス」への転換を打ち出したものと理解できる（高城，1986: 94)。それゆえ，「功利主義に対抗するということは，学問的には経済学に対抗することであり，思想的には『非合理的なものの合理的把握』をめざすことになる」(厚東，1980: 81)。そこから，パーソンズは，いわゆる「秩序問題」を「共通価値による統合」によって解決する方途を模索し，その視座から社会を分析する枠組みを体系化したといえるだろう。

一方で，パーソンズ同様，功利主義を批判し，社会学的視点からその不十分さを指摘した社会学者にP・ブルデューがいる。富永健一によって，「ブルデューが，パーソンズの構造-機能主義について一言半句もふれないのはなぜなのであろうか」(富永，1997: 82）といわれるほど，両者に影響関係はないと思われるが，その社会学的分析対象の確立に功利主義批判という同じ視点を共有していたことは注目に値するだろう。もちろん，功利主義を批判することで導かれる帰結は相違なるものではあるが。

そこで，功利主義批判を通して導かれる両者の帰結の相違が何によって導かれるかということを先取りして述べておくとすれば，それは両者の行為者像に関わるとひとまずいえるだろう。その前段において，ブルデューの「ハビトゥス (habitus)」概念を肯定的に評価した上で[3]，以下のようにいうA・ギデンズのパーソンズ批判を見れば，要点の理解に役立つと思われる。

「ところで，習慣の意義を指摘することは，潜在的に意味のあるものを示唆することになり，パーソンズのとった観点とはある意味で正反対である。『習慣 (habit)』や『慣習 (convention)』は，それほど動機づけされていない活動やその側面を意味している。『秩序の問題』に対するパーソンズ的なアプローチは，コミュニティや社会の活動の最も中心的な特徴もまた，（パーソナリティの動機づけを構成する価値の内面化によって）強く動機づけられた人びとであるという前提に基づいているのに

対して，私は逆がむしろ真であると示唆したい」(Giddens, 1979＝1989: 239)

いったん，ギデンズが指摘するパーソンズの行為者像に対する批判が確認できたところで，ブルデューによる功利主義批判を見ていくことにしたい。それによって，ブルデューの社会学が目指すものが明らかになるであろうと思われる。

ブルデューは，自らの立場を通して，功利主義的見方のもつ問題点を以下のように2点指摘している(Bourdieu, 1994: 154)。

「行為者 (les agents) が意識的理性によって動かされるかのように，つまり彼らが意識的に自らの行為の目的をもち，最小限のコストで最大限の効用を獲得するように行動するかのように扱われる。」[4)]

「行為者を動機づけ得るものすべてが経済的利害関心，つまり金銭に関する利益に還元される。要するに，行為の原則は十分理解された経済的利害関心であり，その目的は，合理的計算によって意識的に置かれた物質的利益であると仮定される。」

ここから看取できるのは，ブルデューが功利主義のもつ行為者像と利害関心 (intérêt) の概念について批判しているということである。まず，行為者像に関してブルデューが批判するのは，功利主義が仮定する合理的行為の意味であろう。そこでの合理性は，「最小限のコストで最大限の効用を獲得する」べく，意識的に目的をもって行為することであり，ブルデューはそうした行為者像に対する不十分さを指摘しているのである[5)]。さらに，ブルデューが利害関心の概念に対して批判するのは，パーソンズ同様，それがいわゆる経済的なもの（金銭や物質）に限定されてしまうということである。実際に行為している行為者は，経済的利害関心のみに基づいて行為するのではない。それゆえ，利害関心の概念を社会学的に展開していく必要があるというのである。

では，ブルデューは，功利主義が見落としてきたと主張する利害関心をどのようにして捉えようとするのだろうか。それは，功利主義が行う意識的計算への還元に，「ハビトゥス (habitus) と場 (champ) の存在論的共犯関係 (le rapport de complicité ontologique)」を対置することによってである (Bourdieu, 1994: 154)。それゆえ，どういう立場からブルデューが功利主義を批判しているかを理解するためにも，ハビトゥスと場の関係を確認することが必要となろう。

3.2 ハビトゥスと場

ブルデューがハビトゥス概念を彼の社会学理論へ導入したのは，主客二元論を批判し，その超克を目指すためであった。ハビトゥスには「従来の社会学的行為論に対する二重のアンチテーゼがはらまれている」(宮島，1994: 98) といわれるように，ブルデューは主観主義と客観主義のいずれの立場をもってしても，行為者の実際の行為を捉えることができないと考える。なぜなら，主観主義は「社会的世界のもつ必然性の説明力を全く欠く」からであり，客観主義は「社会的世界を，観察者の目に供されるスペクタクルにしてしまう」からである (Bourdieu, 1980＝1988: 82-3)。こうした意味で，ブルデューにとって，これらの行為者像は満足のいくものではないのである。では，ブルデューはどういう仕方で行為者を捉えようとするのか。

そこでブルデューが，この隘路を抜け出し，捉えるべきであるとするのが行為者の実践 (pratique) である。そして，その実践を説明するために必要なのが「ハビトゥス」と「場」の概念なのだ。それは，「実践を説明できるのはただ，実践を産み出したハビトゥスが構成される場をなす社会的諸条件と，ハビトゥスが効力を発揮する場である社会的諸条件とを関連させるときだけ」だからである (Bourdieu, 1980＝1988: 89)。

「場」は，政治の場，芸術の場，文学の場と表現されるように，それぞれが相対的に自律していると同時に，「さまざまな位置の構造化された空間」である。ブルデューのいう行為者は，常にこの「場」との関連で捉えられる。なぜなら，「場」と「ハビトゥス」は，「お互いが関係してのみ十分に機能する」(Wacquant, 1992: 19) からである。すなわち，「場」に参加するには，その「場」の諸要求を認める「ハビトゥス」を身につけている必要があり，また，その「ハビトゥス」自身も「場」によって形成される必要があるのである。この「ハビトゥス」と「場」の関係を，ブルデューは，「言語を話すことを学ぶと同時にこの言語の中で考えることを学ぶ」(Bourdieu, 1980＝1988: 108) という母語の学習に例えるように，どちらかを前提にすることなく，両者が相伴って始めて作用するものと考えている。さらに，こうした「ハビトゥス」と「場」，すなわち「身体化した歴史」と「客観化された歴史」を正確に捉えるものとして，「ゲームのセンス (le sens du jeu)」を挙げている (Bourdieu, 1980＝1988: 105)。ブルデューは，しばしばゲームの比喩をもって行為者の実践感覚を表すため，それに従って見ていくことにしよう。

ブルデューによれば，「ゲームのセンス」とは，「ゲーム経験の産物であり，したがってゲーム空間の客観的諸構造の産物であって，この感覚ゆえにこそ，ゲームに参加し，参加によってゲームの賭金を承認する人々にとってゲームは，主観的意味，すなわち意味作用と存在理由をもつばかりでなく，方向や来るべきもの—未来をも持つのである」(Bourdieu, 1980＝1988: 105-6)。ここで示されているように，経験の中でゲームのセンスを身につけることは，ゲームの中で何が賭金，つまり何が利害関心の対象となるかを承認することなのである[6]。ブルデューがしばしば「イリュジオ (illusio)」とも呼ぶこの関係，すなわちゲームにとらわれ，ゲームに手を出す価値があると信じるようハビトゥスに身体化されたこの経験が，「場」において行為する実際の行為者の感覚なのである。

また，こうしたことから，「信念は場への帰属と一体」であり，「実践的信念はあらゆる場がひそかに強制する［ゲームへの］参加権」(Bourdieu, 1980＝1988: 108) となる。「場」というゲームに参加すること，つまりその社会空間における自らの位置をめぐる闘争に加わることは，「ハビトゥス」によって「場」における賭金を自明のものとする（誤認する）がゆえに可能であった。なぜなら「ある場に生まれついて帰属することが現在のなかに含まれる未-来を実践的に先取りする技法としての実践感覚を含んでいるからこそ，この場で生起するすべてのことが道理あるものと見える，すなわち意味を与えられ，客観的に正しい方向に向かっているように見える」(Bourdieu, 1980＝1988: 106) からである。実践感覚を身につけた行為者は，こうして「場」の中において，理に適った行為をすることができるのである。

3.3 ハビトゥスと利害関心

ブルデューがこうした「ハビトゥスと場の存在論的共犯関係」を功利主義に対置することで目指したものは何なのか。ブルデューは，功利主義がその行為者を「意識的な計算」に基づいて行為するものへと還元することに納得できなかった。つまり，実践あるいは「ゲームのセンス」という視点から行為を捉えようとするブルデューにとって，功利主義の行為者像は「合理性」についての見方が一面的であり，狭すぎるのである。ブルデューは，次のようにいう。

「合理的行為あるいは機械的反応以外の行為形式を認めることができないと，理性的意図の産物でなくとも，況んや合理的計算の産物でなくとも道理のあるすべての行為の論理を理解できなくなる。それらの行為は，明示的に構成された目的に照らして自覚的に組織されなくとも一種の客観的目的性に貫かれているし，首尾一貫性の意図や熟慮された決断から出たものでなくとも理解可能であり首尾一貫していて，投企や計画の産物であることなしに未来に適応する。」(Bourdieu, 1980＝1988: 80)

功利主義のように，合理的計算や理性的意図としてしか合理性を認めないとすれば，必ずしもそうした計算や意図を伴わない形で利害を追及する理に適った行為が，その射程から外れてしまうのである。

そこで，ブルデューは，「ゲームのセンス」を身につけた行為者が，その「場」で成功するため，自発的に (spontanément)「無私無欲 (désintéressement)」であるかのように行為することで，自らの利害関心に一致した行為を行いうるということを指摘する (Bourdieu, 1994: 158)。これこそブルデューが功利主義的行為者像からは捉えられない利害関心の形態として考えるものなのである。つまり，そこで示されているのは名誉や気前のよさといった象徴的次元の利害関心である。ブルデューが，人間の行為は経済的次元の利益にのみ基づいてなされるのではないという時の意味はここにある。それゆえ，ブルデューは，功利主義のように明確な意図や意識的な計算を通して利益を追求する行為者に限定することが，実際の行為者の姿を捉える理論としては不十分と考え，「ハビトゥス」と「場」の理論を対置しているのである。

また，ブルデューは，こうした行為者の行為を「戦略 (stratégie)」という概念で表しもする。「社会的行為者は，原則として真に戦略的な意図を非常にまれにしかもたないような戦略をもつ」(Bourdieu, 1994: 156) のである。ここでいう「戦略」は，ブルデューがたびたび批判する功利主義や合理的選択理論がいう意味での戦略的行為でないことはいうまでもない。「戦略」は，「ゲームのセンス」を身につけた実践を行う行為者によって可能となるものであり，そのセンスを産み出した「場」における利害関心に基づいて，臨機応変にあるいは即興的になされるのである。もちろん，その「戦略」は必ずしも意識的になされるわけでもない。

では，ブルデューは，なぜこれほどまでに功利主義を批判するのだろうか。それは，次の理由によると考えられる。

「実践は，論理の論理ではない論理をもつ，したがって，実践の論理に論理の論理を当てはめることは，それを叙述するために使われる道具を通して，叙述したい論理を破壊する恐れがある」(Bourdieu, 1994: 157)

すなわち，ブルデューは，功利主義のような「意識的な計算」のみによる合理的行為は，「論理の論理」に過ぎず，実際の行為者がなす「実践の論理」の叙述をすることができないというのである[7]。そのため，利害関心に関する「実践の論理」を捉えるために必要とされるのが，「ハビトゥス」と「場」であった。「もし無私無欲が社会学的に可能であるとすれば，それは無私無欲にあらかじめ性向づけられた (prédisposés) ハビトゥスと無私無欲が報いられる世界 (univers) との出会いによってのみである」(Bourdieu, 1994: 164)。ブルデューの主張はここに明瞭に表れているといえるだろう。ハビトゥスという視点から

利害関心について考える意義は，「論理の論理」では見逃されてしまう「実践の論理」の中に存在するのである。

4. 目的-手段図式から習慣へ

ここまで，パーソンズとブルデューによる功利主義批判を，特にそれぞれの行為者像を中心にして考察してきた。パーソンズとブルデューは，社会学という視点から見た場合，功利主義のもつ行為者像が不十分であり，それを克服する必要があると考え，それぞれの社会学理論の展開を図った。そうして，両者が共通して功利主義の欠点として指摘するのが，行為の「合理性」に対する見方の狭さである。行為者は，経済的合理性，つまり，最小限のコストで最大限の利益を得るという効率の合理性のみによって行為するのではないということである。社会学的に見た場合，こうした「合理性」概念では，十分に社会的な行為者を捉えられないのである。

そこで，パーソンズは，「規範の私性には規範の共有性」，「能率の規範には価値の規範」を対峙することで功利主義の問題点の克服を図ったのであるが，その基本的な「単位行為」は功利主義のものを受け継いでいる。パーソンズに従えば，行為者は，内面化した「共通価値」に依拠しながら，目的にふさわしい手段を意識的に選択し，行為すると想定されるのである。それゆえ，『社会的行為の構造』においては，モデルとして経済学理論に固執したため，目的-手段図式に組み込むことができない行為の形態にほとんど言及がなく，結果的にその理論体系 (the theoretical edifice) に合わない要素のすべてを，自らの行為理論から剥ぎ取ったといえるだろう (Joas 1996: 33)。

一方，ブルデューは，同じく功利主義批判を展開するなかで，「合理性」概念の不十分さとともに，その行為図式，すなわち意識的に手段選択を行う行為者という前提に対する不満も示していた。功利主義の行為者像を受け継いだパーソンズと異なり，ブルデューは，その行為図式そのものを拒否したといえるのである[8]。ブルデューは，次のように述べている。

> 「ホモ・エコノミクスの考え方は，人間の行動というものを，古典的な，人間をホモ・エコノミクス（経済人）として捉えます。合理的な選択によって生産したり，消費したりする経済人のイメージです。だからホモ・エコノミクスの考え方の背景にあるのは，人間の行動というのは，十分意識的に決断をして，選択をして，計算をして，選びとった選択の結果が人間の行動だという考え方に立脚していますが，ハビトゥスという言葉を私が重視する所以は，まさに人間の行動というのは意識的な選択の結果ではないということです」（ブルデュー/富永，2001: 23）

このように，功利主義に対して「ハビトゥス」と「場」を対置したブルデューは，それによって，必ずしも意識的なレベルでなされるのではない行為という視点から，自らの社会学を構築，展開したのである。そして，そうした「ハビトゥス」のレベルから理解が可能になるのが，ブルデューのいう「利害関心」であり，「戦略」なのである。

こうしたブルデューの試みは，友枝敏雄が「社会学でも近年，要素還元主義的な行為理解にかわって，行為を慣習，習俗との関係において丸ごと捉えようとする行為理解が台頭してきている」（友枝，1999: 104）という流れの中に位置づけられるであろう。もちろん，パーソンズのような「要素還元主義的な方法に依拠した行為理解が無効なものとして完全に葬りさられるわけではない」（友枝，1999: 104）ので

はあるが，逆にいえば，社会学における従来の行為理論がそうした要素還元的な方法に多くを依拠してきたことは間違いなく，ブルデューのような試み，つまりハビトゥス的なレベルからの行為理解がさらに展開される必要があろうと筆者は考える[9]。

5. 結びに代えて

以上，パーソンズおよびブルデューという二人の社会学者の功利主義批判を通して，それぞれがどのような行為者像を描き，いかなる社会学を構想しようとしたのかを見てきた。両者は，功利主義に対してある部分では共通する見解を持ちながら，その行為者像の相違から，異なった理論的帰結を導き出した。ここでは，その理論的成果に関して，成功か否かを問うことが目的ではなかった。ただここで確認したかったのは，パーソンズとブルデューの想定する行為者像である。なぜなら，社会学理論において，行為者像は，それぞれの社会学がどのような方向に展開されるかの重要な転換点であるからである。そうした目的に関して，ここでは，パーソンズ，ブルデュー両者にとって，功利主義的行為理論がその媒介を果たしたことが確認できたはずである。

さらにいえば，パーソンズが功利主義の行為者像を引き継ぎながら理論展開を図ったのに対して，ブルデューが行為者像そのものからの転換を目指したという意味で，その功利主義批判は徹底されていたといえるかもしれない。こうしたブルデューによる批判の根拠は，社会的行為が必ずしも意識的選択を伴ってなされるのではないということであり，パーソンズが中心を担ってきた社会学的行為論，すなわち目的-手段図式とは違った形での行為の分析視角を提供したと考えられる。それが，ブルデューの「ハビトゥス」概念であったことはすでに示したとおりである。だが，ここでは詳述することはできなかったが，ブルデューの「ハビトゥス」概念にも不十分な点は存在する。「ハビトゥス」，すなわち習慣的なレベルからの行為理論自体が，それほど光を当てられてこなかったことを鑑みると，今後それらの不十分な点を乗り越えるためにも，そうした試みのさらなる展開が要請されるであろうと考えられる。それは，これからの筆者の課題でもある。

注

1) C・ケーミックは，パーソンズが功利主義を選択的に解釈し，それが後の社会学理論における功利主義への評価に多大な影響を及ぼしたということを指摘している。本稿では，パーソンズのいう功利主義的行為者像への不満と彼の行為理論の定式化の関係を理解することが主眼であるため，「選択的解釈」の是非を問うことはしない。パーソンズによる功利主義の「選択的解釈」については，Camic (1979)，宮島 (1985: 60-3) を参照されたい。
2) パーソンズの「主意主義的行為理論」における「主観的観点」が十分に組み尽くされていないという批判にA・シュッツのものがある。パーソンズは実証主義を批判しているものの，事実の常識的解釈と科学的言明の区別を無視し，シュッツのいう前科学的生を営む行為者の「日常生活の論理」の解明を目指しているのではないという意味で，相変わらず「科学の論理」を追及しているとされる。この点については浜 (1982) を参照。
3) 以下の部分である。「ブルデューの観点は，私が示そうとしている観点に，ある点では類似している。私のいう構造の二重性について，ブルデューはつぎのように記している。『客観的な構造は，歴史的実践を生み出すとともに，歴史的実践によってたえず再生産され変革される。歴史的実践の生産原理は構造の生産であり，この原理こそ構造の再生産をもたらすものである』というブルデューの主張をおさえておく必要がある。……パーソンズのように価値基準に動機づけを結びつけるのではなくて，ブルデューは習慣 (habitus) という概念を導入している。習慣 (habitus) の概念によって，ブルデューは，行為者の集団やコミュニティが共有している習慣 (habit) を意味しようとしている。」(Giddens, 1979＝1989: 239)
4) 訳出に当たっては，原著である Bourdieu (1994) から行っているが，その英訳版である Bourdieu (1998) を参

考にしてある。Bourdieu (1994) からの訳出に関しては以下同様である。

5) 『実践感覚』においても以下のように述べている。「諸行為（狭義の経済活動と否とを問わず）の『起源』を『意識』の『意図』の内に求める『合理的行為者』理論はしばしば実践の『合理性』について狭い見方をしている。その見方とは，最小費用（経済的）で最大利潤（経済的）を獲得しようとする意思によって自覚的に導かれる諸実践を合理的（あるいは，この論理では同じことに帰着するが，経済的）とみなす経済主義である」(Bourdieu, 1980＝1988: 79)

6) 同様に，次のようにもいう。「経済学者の言う利害とは，歴史を超え，個々の特殊性を超えた，自然・生来の利害であるわけですが，私に言わせれば，利害とは，どんなゲーム［営み］であれ，ともかく何らかのゲーム［営み］への打ちこみ［投資］であり，そのゲームへの参加条件であって，なおかつそのゲームによって作り出されると同時に強められるものです。ですから，界の数と同じ数だけ利害の形もあるわけです。」(Bourdieu, 1987＝1991: 81)

7) ここでブルデューが主張していることは，注 2) で言及したシュッツのパーソンズ批判とも通ずる点であると考えられる。しかし，ブルデュー自身は，シュッツの現象学的社会学も「経験の可能性の条件への問い」を排除してしまうとして批判している (Bourdieu, 1980＝1988: 38)。ただ，「論理の論理（あるいは科学の論理）」ではなく「実践の論理（あるいは日常生活の論理）」を捉えようとするシュッツとブルデューの視点の異同については詳細な検討も必要であろうと考えている。その手がかりになるものとして矢田部 (1999) がある。

8) パーソンズとブルデューの行為者像に関して，宮島喬は次のように述べている。「行動への性向を，学習，あるいは社会化のなかでの習得の所産としてあつかう点ではもちろん両者とも共通の土俵のなかにあるとはいえ，そこで学習されるものはブルデューによれば，明示的な当為命題とか，一義的に明白にパターン化された行動規則などではない。むしろ一定の可塑性，代替的選択ないし変換の力，さらには時間のなかでの調整や展開の能力などをそなえた性向の構造を獲得することが，この学習である。であるとすれば，いわゆる規範の内面化による説明は，問題の部分化であり，静態的にすぎるといえよう」(宮島，1994: 98)。こうした意味で，社会的条件という制約つきでの自由を「ハビトゥス」概念によって捉えようとするブルデューと違って，パーソンズの「価値の内面化」による議論は，行為の創造的次元 (the creative dimension of action) の考慮を忘却しているともいえるだろう (Joas, 1996: 34)。ただ，同様に，創造性に関するブルデューの「ハビトゥス」概念の不十分さから，パーソンズの構造-機能主義との類似性も指摘されている (Jenkins, 2002: 81)。

9) この意味で，習慣というレベルから行為を捉えるという視点が社会学において，それほど顧慮されてこなかったのは，パーソンズの影響力が大きかったからではないかと考えている。そうした習慣概念と社会学の関係については，別稿で論じる予定である。

参考文献

Bourdieu, P., 1980, *Le Sens Pratique*, Les Editions de Minuit. 今村仁司ほか訳　1988-90『実践感覚』1・2　みすず書房.

———, 1980, *Questions de Sociologie*, Les Editions de Minuit. 田原音和ほか訳，1991『社会学の社会学』藤原書店.

———, 1987, *Choses dites*, Les Editions de Minuit. 石崎晴巳訳 1991『構造と実践』藤原書店.

———, 1994, "Un acte désintéressé est-il possible?" dans *Raisons pratique*, Éditions du Seuil: 147-67＝1998, "Is a Disinterested Act Possible?" in *Practical Reason*, Stanford University Press: 75-91.

Bourdieu, P. and Wacquant, L., 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press.

ブルデュー/富永健一，2001,「社会学とは何か」『環 Vol. 5』藤原書店.

Camic, C., 1979, "The Utilitarians Revisited" *American Journal of Sociology*, **85**: 516-50.

———, 1986, "The Matter of Habit" *American Journal of Sociology*, **91**: 1039-87.

Giddens, A., 1979, *Central Problems in Social Theory*, University of California Press. 友枝敏雄ほか訳，1989『社会理論の最前線』ハーベスト社.

浜日出夫，1982,「ピグマリオンとメドゥーサ—A. シュッツの『現象学的社会学』の位置」『社会学評論』**33**(1): 64-77.

Jenkins, R., 2002, *Pierre Bourdieu revised edition*, Routledge.

Joas, H., 1996, *The Creativity of Action*, Polity Press＝1992, *Die Kreativität de Handelns*, Suhrkamp.

小原一馬，1997,「ブルデュー資本概念における「秘密」と「隠蔽」—ブルデューモデルによる「公然の秘密」とその

ゴフマンモデルとの相補性—」『ソシオロジ』42: 3-24.
———, 2002,「気高さの社会学—シグナル理論から見たブルデューとヴェブレン—」『社会学評論』52(2): 196-213.
小松田儀貞, 1991,「ブルデュー社会学における『戦略』論の原像—構造と行為をつなぐ契機—」『社会学研究』57: 135-58.
厚東洋輔, 1980,「主意主義的行為理論」安田三郎ほか編『基礎社会学・第Ⅰ巻・社会的行為』東洋経済新報社.
宮島 喬, 1985,「功利主義批判と社会学的思考の展開—デュルケームとウェーバーを通して—」『思想』727: 58-81.
———, 1994,『文化的再生産の社会学-ブルデュー理論からの展開』藤原書店.
Parsons, T., 1937, *The Structure of Social Action*, McGraw-Hill. 稲上・厚東ほか訳, 1976・1989『社会的行為の構造』(第一・五分冊) 木鐸社.
———, 1951, *The Social System*, The Free Press. 佐藤勉訳, 1974『社会体系論』青木書店.
高城和義, 1986,『パーソンズの理論体系』日本評論社.
———, 2003,『パーソンズとウェーバー』岩波書店.
富永健一, 1986,『社会学原理』岩波書店.
———, 1997,「社会と社会学における日本とフランス—日本から見たブルデュー社会学—」『思想』871: 60-85.
友枝敏雄, 1998,『モダンの終焉と秩序形成』有斐閣.
———, 1999,「パーソンズと社会システム論」『社会学理論の〈可能性〉を読む』情況出版: 102-17.
Wacquant, L., 1992, "Toward a Social Praxeology: The Structure and Logic of Bourdieu's Sociology" in *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press: 1-59.
Weber, M., 1922, Soziologische Grundbegriffe in *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen, J. C. B Mohr. 清水幾太郎訳, 1972 『社会学の根本概念』岩波書店.
山下雅之, 1983,「行為理論と秩序問題」『ソシオロジ』28(2): 17-37.
矢田部圭介, 1999,「理に適ったふるまいとしてのプラティック—シュッツからブルデューへ—」ブルデュー社会学研究会編『象徴的支配の社会学』 恒星社厚生閣.
油井清光, 1995,『主意主義的行為理論』恒星社厚生閣.